『敦煌寫本研究年報』第六號（2012.03）155-167 頁

大英博物館藏
甲戌年四月沙州妻鄧慶連致肅州僧李保祐狀*

坂尻彰宏

はじめに

スタインが敦煌莫高窟藏經洞より持ち歸った敦煌文獻のほとんどは現在大英圖書館に所藏されているが、その一部は大英博物館に保管されている。本稿で取り上げる手紙文書も、その紙背に繪畫が描かれていたため繪畫資料として大英博物館に所藏されたものの一つである[1]。

本文書の内容は沙州（敦煌）在住の女性から肅州（酒泉）の僧侶に宛てた私信であり、これまでも重要な資料として注目されてきた。アーサー・ウェーリー（Arthur Waley）氏は、この文書についてスタイン將來敦煌繪畫の目錄中で紹介し、その内容を英語譯している[2]。また、金榮華、榮新江、沙知の諸氏は、大英圖書館のスタイン・コレクションに含まれない貴重な文書として言及し、その錄文を提示している[3]。

しかし、いくつかの解決すべき問題が殘されている。目錄はあるものの、あくまで繪畫の一部として扱われているため、文書として見た場合の情報が不足しており、文書の形態やそれをふまえた機能についての分析が不十分である。とくに、目錄などで本文書を草稿とみなしている點については檢討が必要だろう[4]。また、

*本稿執筆の過程で高田時雄京都大學人文科學研究所教授をはじめ諸先生方より多くのコメントをいただいた。記して感謝したい。なお、本稿は大坂大學文學研究科「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」による研究成果の一部である。

[1]大英博物館での所藏番號は 1919, 0101, 0.76 である。この他にスタイン將來繪畫資料の目錄番號として Stein Painting (SP.) 76、原番號として Ch.00144 の番號を持つ。本文書の出版された寫眞としては、中國社會科學院歷史研究所他 (編)1997、179-181 頁を參照。

[2]Waley 1931 pp.112, 315-316 (Appendix I) 參照。なお、スタインの報告書にも簡單な目錄情報がある。Stein 1921, vol.2, pp.966-967 參照。

[3]金 1983、9-10 頁；榮 1996a、10 頁；沙 2000、180-181 頁參照。

[4]Waley 1931, p.112; Whitfield and Farrer 1990, p.92; Fraser 1996, p.173；朝日新聞社事業本部文化事業部 (編) 2003、219 頁參照。

諸氏の錄文・翻譯にもなお改善の餘地がある。

そこで、本稿では文書の原物調査に基づいて情報を整理し、錄文と翻譯とを提示し、文書の形態を手がかりに本文書の機能について檢討を行いたい[5]。

一、文書の形態

本文書は一紙からなる手紙文書であり、現狀では他の三紙とともに紙本墨畫の一部を構成している［圖 1 參照］。本文書は寸法が縱 32 センチ・横 43 センチで缺落はなく、紙の厚さや紙質の面からみても九～十世紀に使用された一般的な紙に書かれている[6]。テキストは表面に 19 行、背面に表面とは逆方向に 2 行あり、丁寧に書きそろえられている。文書の上には折りあとがあり、2 センチほどの幅で垂直方向に 20 本ほど、背面の 2 行のテキストを挾む形で水平方向に 2 本確認できる［圖 2 參照］。紙面全體に染みや汚れが散見するが、背面の 2 行のテキストの周圍の變色が目立つ。本文書の背面には維摩經變相圖の文殊菩薩の墨畫が描かれ、維摩詰が描かれた紙と昆舍離城や韋提希夫人の十六觀が描かれた紙とともに一つに貼り合わされている[7]。この文殊菩薩の墨畫の線は背面のテキストの上に描かれているので、墨畫の方が本文書より後に描かれたことは明らかである。なお、これらの墨畫と本文書の内容とは全く關係がない。

二、錄文・翻譯

以下に錄文と翻譯とを提示する。文字の異綴や音通による書き換えは錄文中で（ ）中に補い、先行する錄文との文字の異同や文字の抹消・補記等の情報は錄文注に示す。

【錄文】

表面：

1　孟夏漸熱。伏惟、

2　肅州僧李保祐尊體起居萬福。卽日沙州丈人鄧定

[5]本文書の原物調査に當たっては、大英博物館のマイケル・ウィリス博士（Dr. Michael Willis）をはじめ、同館閲覽室の方々にご助力をいただいた。記して感謝したい。

[6]本文書の表面からみて右側の紙は縱 30.5 センチ・横 44 センチ、左側は縱 30.5 センチ・横 44 センチ、さらにその左側の紙片は縱 30.5 センチ・横 3 センチ。この紙片には「□□年二月四日□［　］とある 1 行のテキストがある。なお、これらはいずれも本文書と同樣の質の紙である。

[7]これらの墨畫のモチーフについては、Waley 1931, pp.111-112；松本 1937、155 頁、圖版 54b；ウイットフィールド 1982、337 頁、圖 86-88；Whitfield and Farrer 1990, pp.92-93; Fraser 1996, pp.170-173, figs.43-45；朝日新聞社事業本部文化事業部 (編) 2003、219 頁參照。

3　子・駱駝官・妻鄧慶連・女長延・長美及合家大小蒙恩、不審
4　近日
5　尊體何似。伏惟、已時善加保重、遠城望也。沙州丈人・駱駝
6　官・妻慶連・女長美・長延及合家大小、惣得平善、莫用優（憂）
7　煩。丈母并應子（姨子）早年死去、只殘孤女慶連、女長美・長延竝無
8　彼輩（匹輩）。婿李保祐取東頭去、一日日夜大有優（憂）愁、意中不
9　税（悅）、身形微劣消瘦。早夜承忘（承望）東頭身體難亡。人邊
10　鄧（發）遣一字及物色、有口好惡言語、都無不來不見。日夜嚎咷大哭
11　割股心腸。家内叔姪扇後大有欺屈。前伴般次僧陰住德
12　手上一个書得者、聞句好惡言語。妻慶連切囑肅州僧
13　李保祐、有女長延・長美二人年大兩个惣嫁得、早萬（早晩）來者。
14　不來廻發一字。別覓衣飯嫁去。般次内趙法律手上發
15　遣土布汗衫一領・菲草壹斗、到日收領。實有重信衣服
16　發遣擧付不得。今因人往、空付丹（單）書起居。不喧。謹狀。
17　　甲戌年四月　日沙州妻鄧慶連狀上

18　又囑李闍梨、弟鄧幸德甘州賊打將、長聞甘州在者。李
19　闍梨好與尋趁收續（贖）、得不得亦廻發一字。

背面：

(1)　沙州妻鄧慶連狀上
(2)　肅州僧李保友（祐）處

圖 1：文書の形態

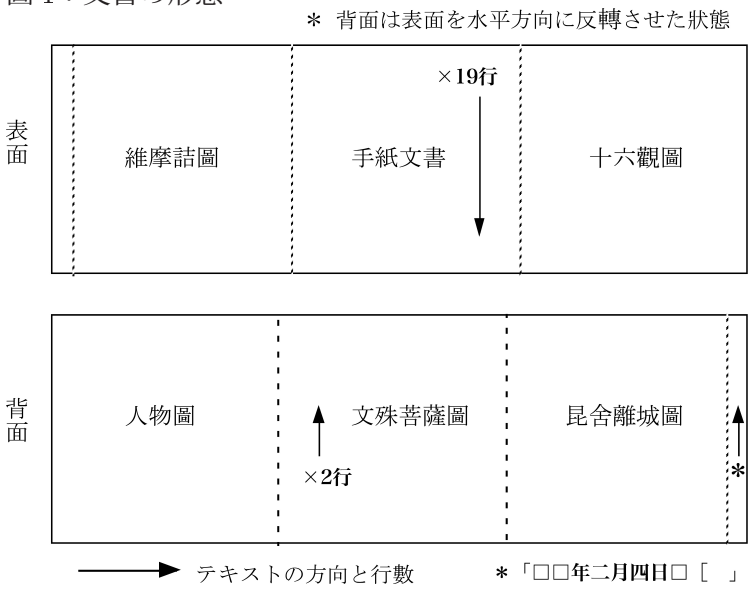
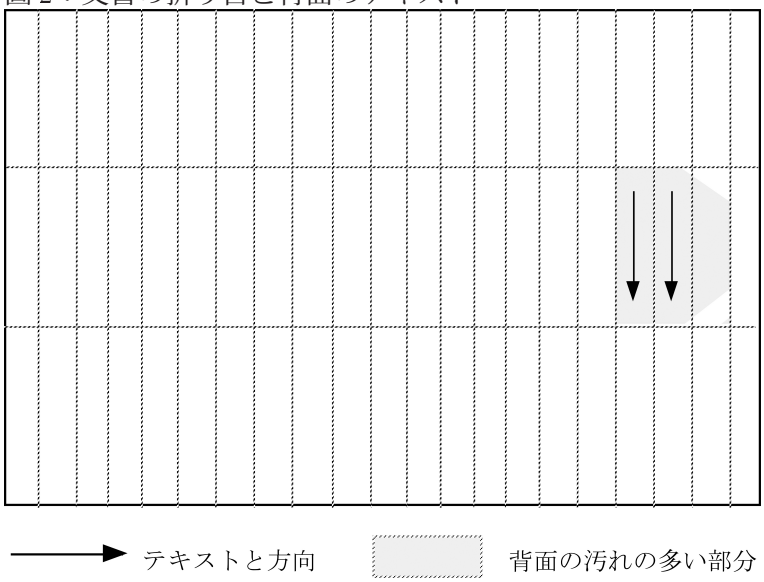


圖 2：文書の折り目と背面のテキスト



【錄文注】（金＝金 1983、9-10 頁；榮＝榮 1996a、10 頁；沙＝沙 2000、180-181 頁）

第 1 行「伏惟」：金・沙は「伏維」。

第 2 行「李保祐」：榮は「李保佑」。

第 3 行「長延・長美」：「長延」は行間に補記。金は「長美・長進」、榮は「長進・長美」。

第 3 行「不審」：金は「不宣」。

第 5 行「伏惟」：金は「伏維」。

第 5 行「遠城」：榮は「遠誠」。

第 5 行「駱駝」：字間に返り點あり。

第 6 行「長美・長延」：「長延」は行間に補記。金は「長美・長進」、榮は「長進・長美」、沙は「長延・長美」とする。

第 6～7 行「優（憂）煩」：金は「懷煩」。

第 7 行「長美・長延」：「長延」は行間に補記。金は「長美・長進」、榮は「長進・長美」。

第 8 行「李保祐」：榮は「李保佑」とする。

第 8 行「東頭」：金は「東故」。

第 8 行「一日日」：行間に繰り返し記號あり。金・沙はこの記號を採らない。

第 9 行「消瘦」：榮は「清瘦」。

第 9 行「東頭」：金は「東𢿱」。

第 9 行「身體難亡」：金は「身體難已」とし、榮は「早夜難亡（忘）」とする。直後の「有口」の 2 文字は抹消記號付き。

第 10 行「鄧（發) 遣」：金は「鄧遺」、榮は「發遣」、沙は「鄧遣」とする。1 文字目の字形は「鄧」だが、文脈から見て「發」の誤記と思われる。
第 10 行「及物色」：行間に補記する。
第 10 行「嚎」：金・榮は「號」とする。
第 10 行「咷」：榮は「啕」。
第 11 行「前件」：榮は「前伴」。
第 12 行「言語」：金は「語言」。
第 12 行「切囑」：「初」に筆を入れて「切」に直す。金、榮、沙は「初囑」とする。
第 13 行「李保祐」：榮は「李保佑」とする。
第 13 行「長延」：金・榮は「長進」。
第 13 行「來者」：金は「來老」、榮は「來去」とする。
第 14 行「別覓」：金は「□□」。
第 15 行「壹斗」：金、榮、沙は「壹斛」とする。
第 15 行「衣服」：金は「□」。
第 16 行「空付」：金は「空向」。
第 16 行「謹狀」：金は「□」とする。
第 17 行「四月　日」：榮は「四月四日」とする。
第 17 行「沙州妻鄧慶連」：金・沙は「沙州鄧慶連」。
第 17 行「狀上」：金・榮は「狀」のみ。
第 18 行「李闍梨」：金は「李周集」。
第 18～19 行「李闍梨」：金は「李周集」。
第 19 行「好與」：字間に返り點あり。金・榮は「與好」。
背面：金・榮は收錄しない。沙は蔣孝琬の書き込みとみなす。

【翻譯】

夏の初めとなり暑さが増してまいりました。肅州の僧李保祐さまはご健勝のことと存じます。日頃から沙州のお父さま鄧定子、駱駝官、妻の鄧慶連、娘の長延と長美から家中の大人から子供にいたるまでお世話になっておりますのに、近頃はあなたさまのご機嫌がいかがであるか存じません。時節柄くれぐれもご自愛下さいますよう、遠いまちよりお祈りいたします。沙州のお父さま、駱駝官、妻の鄧慶連、娘の長美と長延から家中の大人から子供にいたるまで、みな平穏無事でおりますのでご心配には及びません。

お母さまやおばさま（あるいは姉妹）が早くに亡くなりましたので、（女の家族は）慶連ひとりきりで、娘の長美や長延にも相手がおりません。婿である李保祐さまが（沙州から）東に向かって立ち去ってからは、一日中晝も夜も悲しみがつのり、心がふさいで、やつれ果ててしまいました。朝から晩まで東にいらっしゃる

（あなたの）お體が心配でなりません。

人づてにお手紙と贈り物とをお送りしましたが、口ではいろいろと言うことがあったとしても、全くお越しにならず、お會い下さりもしないということがあるでしょうか。晝も夜も泣き叫び、身を切る思いです。家内のおじやおいも（あなたと）分かれてより辛い思いをしています。先ごろ（到着した）キャラヴァンに（同行していた）僧の陰住徳の手から手紙を受け取って、（ようやく）いろいろと知ることができました。

妻である慶連より肅州の僧李保祐さまに心からお願いいたします。娘の長延と長美も大きくなり、二人とも嫁入りすることになりましたので、近いうちにお歸り下さい。お歸りにならないなら折り返しお返事を下さいませ。ほかで（嫁入りのための）衣服や食べ物をもとめて、嫁にやることにいたします。（いま、これから肅州に向かう）キャラヴァンに（同行する）趙法律の手に（あずけて）土布（アサヌノ）の汗衫（シャツ）一着と菲草を一斗送りますので、（キャラヴァンが）到着した日に受け取って下さいませ。本來であれば立派な贈り物や衣服をお送りするところですが、ままなりません。いま、（たまたまそちらに）ひとが行きますので簡單なお手紙を送るばかりです。（手紙ですから用件を）述べつくせません。謹んでお手紙を差し上げます。

甲戌年四月某日　沙州の妻鄧慶連がお手紙を差し上げます。

（追伸：）そのうえ、李闍梨さまにお願いいたします。（わたくし慶連の）弟である鄧幸徳が甘州の賊に略取されて、長らく甘州に留め置かれていると聞きました。李闍梨さまにおかれましては、どうぞ（甘州に幸徳を）訪ねて（身柄を）買い戻していただきますように。（幸徳を）取り戻せたかどうかにつきましては、折り返しお返事下さいませ。

背面（上書き）：

沙州の妻鄧慶連から、肅州の僧李保祐さまのもとにお手紙を差し上げます。

三、内容と作成年代

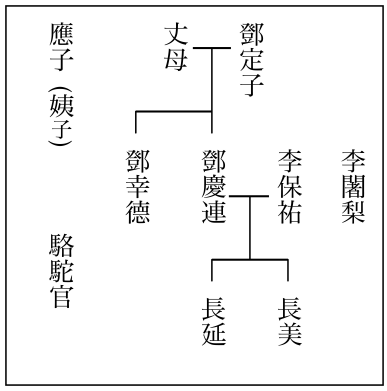
以上、本文書のテキストは大きく分けて手紙の本文、追伸、背面の上書き[8]からなっている。本文の内容は沙州の鄧慶連から肅州に住む僧侶で夫でもある李保祐に宛てた私信であり、二人の娘の結婚を機會に彼の歸郷を促す内容を持っている。追伸では、鄧慶連が、身柄を拘束されて甘州に留められている弟幸徳を取り戻すよう、同じく肅州にいると思われる李闍梨という別の僧侶に依頼している。また、上書きでは、慶連から保祐への宛名書きがなされている。

これに對し、本文書を英語譯したウェーリー氏は、これを鄧慶連が僧侶の李保祐

[8] 上書きとは、手紙文書本紙の字面を内側にして短册狀に折り疊み、外側にでた背面の一部に差出人と受取人とを記したものである。

へ娘たちの結婚相手の斡旋を依頼する手紙であると解釈し、兩者が夫婦の關係にあったとは見ていない。ウェーリー氏は3行目、5行目から6行目にかけての「駱駝官妻鄧慶連」を“Ch‘ing-lien, wife of the camel-man”と譯し慶連は駱駝官の妻であると考えている[9]。しかし、手紙の本文と上書きでは、鄧慶連は李保祐に對して「妻鄧慶連」と名乗っており彼らが夫婦の關係にあったことは明らかである。もし、鄧慶連が駱駝官の妻であるなら、本文の6行目以降や上書きで「妻鄧慶連」とだけ名乗るのは不自然であろう[10]。また、ウェーリー氏の英語譯はその出版された年代を考えると優れた翻譯であるといえるが、用語の翻譯に混亂があり文脈の把握が正確ではない個所がある。たとえば、8、9行目の「東頭（東の方）」を何らか物品に、9行目から10行目にかけての「邊鄧（人邊發遣：人づてに送る）」と11、14行目の「般次（キャラヴァン）」とを人名に、また14行目の「法律（僧官名）」を“legally”に、18行目の「賊打將（賊による略奪）」を“Captain of the Police”に誤って譯している。とりわけ、「般次」を人名と解釋することで、手紙の後半の内容が、李保祐に娘たちの結婚相手として「般次」を斡旋するように依頼する方向に大きく變わってしまっている[11]。鄧慶連から李保祐への依頼の内容は、13行目冒頭から14行目の「般次」の前までで終わっており、この部分で娘たちの結婚と李保祐の歸郷について述べられている。それ以降は、手紙と一緒に送る贈り物に話題が移っているので英語譯のように解釋することはできない。

圖3：手紙に現れる人物



文書の作成年代に關しては、ウェーリー氏は甲戌年を914年ないし974年にあ

[9]標點のある榮新江、沙知兩氏の錄文でも「駱駝官」と「妻鄧慶連」との間に竝列點は打たれていないので同樣に解釋しているものと思われる。

[10]なお、この二人を中心にした手紙に現れる人物の關係については、圖3を參照。

[11]漢語の「般次」がキャラヴァンを指すことについては、藤枝1943、78-79頁, 注191；Hamilton 1955 p.78；張廣達1991 969-971頁；沙1997、142-145頁：曾2001、6-7頁、王璐・林峰2007、79-80頁；張小豔2007、274-277頁；黒2010、364頁參照。

て、榮新江氏はこれを914年に比定し、沙知氏は榮氏の説に従っている[12]。文書にあらわれる「駱駝官」は、歸義軍時代のラクダ管理官である知駝官（駝官）であると思われるので[13]、本文書が歸義軍時代（九世紀半〜十一世紀初）のものであることは確實である。この時期の甲戌年は、854年、914年、974年のいずれかにあたる。本文書の追伸部分で鄧慶連の弟幸德が甘州で捕虜になっていることに着目すれば、甘州にウイグルなどの敵對勢力が成立していない854年は候補にはならない[14]。榮新江氏は、金山國時代の甘州ウイグルとの戰爭狀態（906〜911年）の時期に幸德が捕らえられたと見なし、914年を文書の作成年代としている。榮氏の説は當時の時代背景をもとにしており説得力に富む。ただ、甘州ウイグルとの紛爭や襲擊事件はその後もしばしば發生しているので、幸德が甘州に捕らえられている狀況は974年でもありうる[15]。したがって、現狀では本文書の作成年代を914年と974年のいずれかに確定することは困難である。

四、上書きと折り方

本文書には背面に2行のテキストがあり、沙州の鄧慶連から肅州の李保祐に宛てた手紙であることが明記されている。この背面のテキストについては、ウェーリー氏の目錄と英語譯には記載が無く、金氏や榮氏の錄文でも文字がおこされていない。沙氏の錄文には採錄されているが、沙氏はこれをスタインの助手であった蔣孝琬が整理のために書き込んだものと見なしている[16]。

しかし、この背面のテキストが本文書の上書きであることは、その折り方や類例との比較から明らかである。背面のテキストは、文書背面を正面にした場合の右端やや左に、文書の上下のほぼ中央部分に2行に渡って表面の本文とは逆方向に書かれている［圖1ならびに圖2參照］。文書の折りあとは、この2行を避けるように格子狀に付いている。こうした折りあとの特徵は、表の字面を内側にして上端から三分の一と下端から三分の一を折り、帶狀になったものを左端から折りたたんで短册狀に折り疊み、その表裏に文字を書いたことに由來すると思われる

[12]Waley 1931 pp.112, 316；榮 1992、83頁；榮 1996a、10頁；榮 1996b、227-228頁；沙 2000、180頁參照。

[13]知駝官については、雷 1996、39-41頁；張亞萍 1998、56-58頁參照。なお、S.2474「己卯年（979）十一月駝官鄧富通請判憑狀」と P.4525 (8)「官布籍」には 鄧姓の知駝官である鄧富通も見える。S.2474の錄文・翻譯は坂尻 2003、185-187頁參照。

[14]甘州ウイグルの成立時期については、森安 1980、305-313頁；榮 1996b、298-309頁參照。

[15]たとえば、P.3272「丁卯年（967）正月廿四日甘州使頭閻物成去時書本」には甘州の勢力による「賊行（略奪行爲）」が言及されている。赤木 2006、82-84頁參照。

[16]本稿錄文注ならびに沙 2000、181頁參照。

［圖 4 参照］。前述のように文書背面の上書きのまわりは周圍に比べて汚れが目立っており［圖 2 参照］、この部分のみが外部に露出していたことをうかがわせる[17]。

また、このような上書きを用いる例は同時期の他の漢文手紙文書にも確認できる［圖 5 参照］。これらの上書きは、全て本文書と同じ 2 行からなっている。折り方では、本文書と同様に字面の左端から疊む方法が用いられているものが多い[18]。テキストの方向は、本文書のように表面の本文と逆方向に書かれる場合もあるが、同方向に書かれる場合もあり一定していない。發信者と受信者との配置は、本文書のように紙の端に近い方に發信者を書く場合が多い[19]。用語や表現については共通する要素はほとんどないが、發信者の居所は必ず書かれる。また「謹謹」（S. 1284）や「謹謹上」（羽 172V ノ 2）の用語や脇付の使用（S. 1284）など封紙に用いられる表現に近いものも見られる[20]。このように、異同はあるものの、これらの漢文手紙文書の上書きは形態や機能の點では共通する要素を持っており、封紙を使わずに本紙を折り疊んで背面に上書きを書く方法は廣く使われていたものと思われる[21]。本文書の上書きも同様の作法で書かれており、後人の書き込みなど

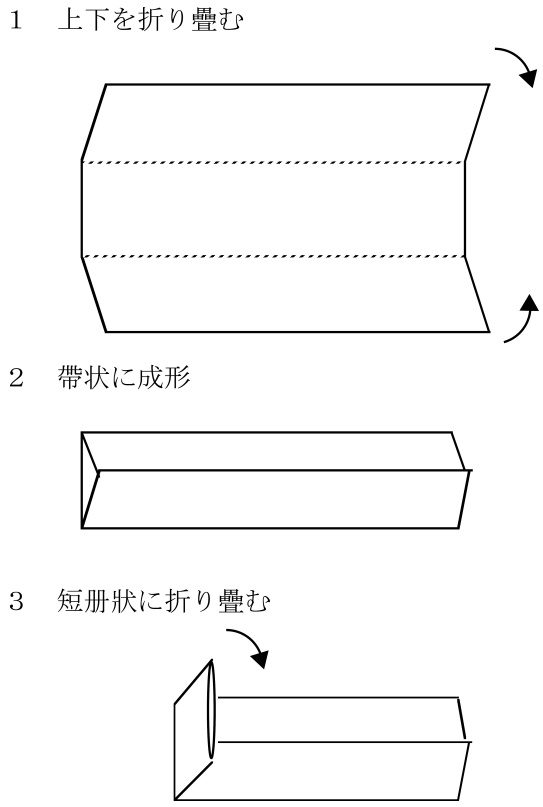


圖 4: 文書の折り方

[17]なお、周圍の汚れは臺形のような形をしており、このような形の汚れは S.4362 にも見られる。さらに類例を集めて分析する必要があるが、あるいは書儀類に見られる封紙の角を折る封式に關係するのかもしれない。周・趙 1995、335-337 頁；呉 2002、243-245 頁参照。

[18]S.4362 のように右端から疊まれているものもある。

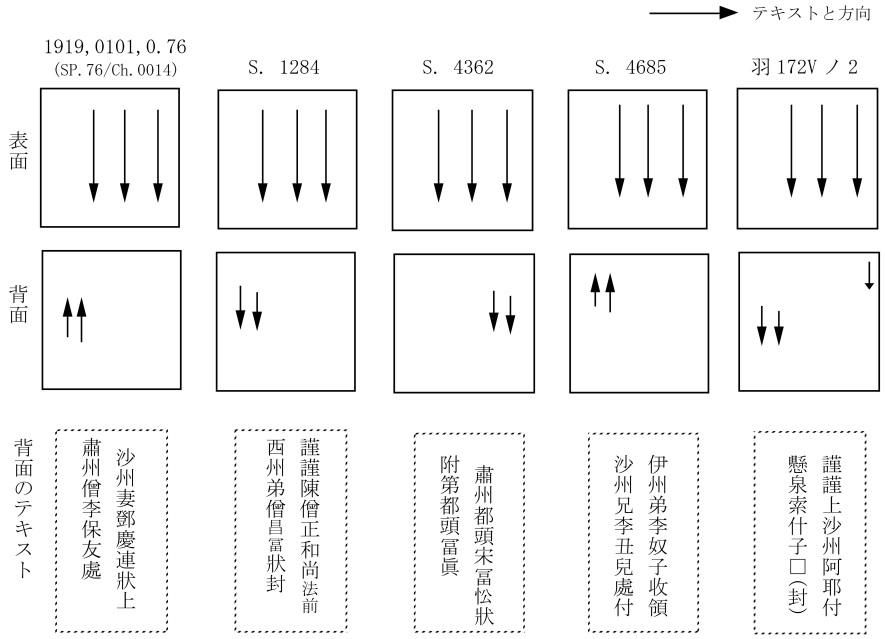
[19]S.4685 のように紙の端に近い方に受信者が書かれる場合もある。

[20]敦煌文獻中の漢文手紙文書の封紙を使う封式については、赤木 2005、8-11 頁；王使臻・王使璋 2011、37-44 頁参照。

[21]上書きを使う封式は非漢語の手紙文書でも使われており、言語に關わらず廣まっていたことがうかがえる。チベット文手紙文書については、武内紹人氏の分類でいうところの手紙タイプ II と手紙タイプ III とに上書きがみられる。武内 1986、576、578 頁参照。ウイグル文手紙文書については、森安 2011、377-378 頁を参照。

ではなく上書きであることは疑いない[22]。

圖 5：漢文手紙文書の上書き（十世紀頃）



＊ 背面は表面を水平方向に反轉させた狀態

おわりに

本文書は、内容が首尾一貫していることや上書き・折り方の狀態からみて、草稿ではなく實際に使用された手紙であると考えられる。前述のように、目錄などの記述では本文書は草稿として扱われているが、これらはウェーリー氏の目錄の記載を引き繼いだだけのものであり、特に根據があるわけではない。ウェーリー氏がそのように判斷したのは、本文書に修正が多い點やこれが藏經洞發見の墨畫の料紙に再利用されている點に着目して、この手紙が實際に肅州に送られていないと考えたためだろう。しかし、實用の手紙に修正がされた例は他にも見られるし[23]、折り目や汚れのつき方から見ても、本文書が手紙の形にされて實際に使われたことは確實である。なお、肅州に送られた手紙が沙州（敦煌）に戻った理由については推測に賴るほかないが、この手紙を受け取った李保祐が手紙を持參して沙州に歸鄉したと考えるのが妥當であろう。

[22]蔣孝琬の書き込みと思われるものは手紙文書 S.1284 の紙背にも見られるが、朱字で蘇州號碼とともに「西州富昌和尚書」と書かれており、上書きとは全く異なる。

[23]修正のある實用の手紙としては、S. 4685、S. 4362 などがある。

【参考文獻】

［和文・中文：五〇音順］

赤木崇敏 2006「歸義軍時代チベット文手紙文書 P.T.1189 譯註稿 」『東トルキスタン出土「胡漢文書」の總合調査』(科學研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書；平成 15 年度～平成 17 年度；研究代表者 荒川正晴)、77-86 頁。

――― 2005「河西歸義軍節度使張淮鼎――敦煌文獻 P.2555 pièce 1 の檢討を通じて」『内陸アジア言語の研究』20、1-25 頁。

朝日新聞社事業本部文化事業部（編）2003『大英博物館の至寶展：創立 250 周年記念』東京：朝日新聞社、2003、257 頁。

ウイットフィールド，R.（著）・上野アキ（譯）1982『西域美術――大英圖書館スタイン・コレクション 2 敦煌繪畫 II』東京：講談社、362 頁。

榮新江 1992「金山國史辨正」『中華文史論叢』50、73-85 頁。

――― 1996a『海外敦煌吐魯番文獻知見錄』南昌：江西人民出版社、4 ＋ 6 ＋ 3 ＋ 231 頁。

――― 1996b『歸義軍史研究――唐宋時代敦煌歷史考索』上海：上海古籍出版社、2 ＋ 3 ＋ 3 ＋ 6 ＋ 426 頁。

王使臻・王使璋 2011「敦煌所出唐宋書札封緘方法的復原」『文獻』2011-3、37-48 頁。

王璐・林峰 2007「敦煌俗語詞考釋二則」『文教資料』2007-3、79-80 頁。

金榮華 1983「敦煌寫卷拾遺」『大陸雜誌』66-1、9-11 頁。

黒維強 2010『敦煌、吐魯番社會經濟文獻詞匯研究』北京：民族出版社、4 ＋ 4 ＋ 2 ＋ 2 ＋ 26 ＋ 565 頁。

呉麗娛 2002『唐禮摭遺：中古書儀研究』北京，商務印書館，8+7+650 頁、圖版 4。

沙知 1997「般次零拾」、白化文等（編）『周紹良先生欣開九秩慶壽文集』北京：中華書局、142-148 頁。

――― 2000「Ch.00144 等：英藏敦煌文獻二件釋錄」、宋家鈺・劉忠 (編)『英國收藏敦煌漢藏文獻研究：紀念敦煌文獻發現一百周年』北京：中國社會科學出版社、179-182 頁。

坂尻彰宏 2003「敦煌判憑文書考序論」、森安孝夫・坂尻彰宏 (編)『シルクロードと世界史』豐中：大坂大學 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文學」、159-195 頁。

周一良・趙和平 1995『唐五代書儀研究』中國社會科學出版社、339 頁。

曾良 2001『敦煌文獻字義通釋』廈門：廈門大學出版社、3 ＋ 2 ＋ 7 ＋ 213 頁。

武内紹人 1986「敦煌・トルキスタン出土チベット語手紙文書の研究序說」、山口瑞鳳 (編)『チベットの佛教と社會』、東京：春秋社、563-602 頁、圖版 2。

中國社會科學院歷史研究所他 (編)　1997『英藏敦煌文獻』14、成都：四川人民出版社、4+24+300 頁、カラー圖版 16。

張亞萍 1998「唐五代敦煌地區的駱駝牧養業」『敦煌學輯刊』1998-1、56-59 頁。

張廣達 1991「唐末五代宋初西北地區的般次和使次」、季鏡・蔣忠新 (主編)『季羨林教授八十華誕紀念論文集』下、南昌：江西人民出版社、969-974 頁（再錄：同氏著『西域史地叢稿初編』上海：上海古籍出版社、1995、335-346 頁)。

張小豔 2007『敦煌書儀語言研究』北京：商務印書館、4+445 頁。

藤枝晃 1943「沙州歸義軍節度使始末（四・完)」『東方學報（京都)』13-2、46-98 頁。

松本榮一 1937『燉煌畫の研究』全 2 卷、東京：東方文化學院東京研究所。

森安孝夫 1980「ウイグルと敦煌」、榎一雄 (編)『講座敦煌 2 敦煌の歷史』東京：大東出版社、297-338 頁。

――― 2011「シルクロード東部出土古ウイグル手紙文書の書式（後編)」、森安孝夫 (編)『ソグドからウイグルへ――シルクロード東部の民族と文化の交流』東京：汲古書院、335-425 頁。

雷紹鋒 1996「論曹氏歸義軍時期官府之“牧子”」『敦煌學輯刊』1996-1、39-46 頁（再錄：同氏著『歸義軍賦役制度初探』臺北：洪葉文化事業、2000、175-189 頁)。

［歐文：アルファベット順］

Fraser, Sarah Elizabeth 1996, *The Artist's Practice in Tang Dynasty China (8-10th Centuries)*, University of California, Berkeley, xxi, 513p.

Hamilton, James 1955, *Les Ouïghours à l'époque des Cinq Dynasties d'après les documents chinois*, (Bibliothèque de l'Institut des Hautes Etudes Chinoises, 10), Paris: Imprimerie nationale / Presse universitaire de France, 201p., + 4pls., + 1 map. (Repr.: Paris 1988.)

Stein, Marc Aurel 1921, *Serindia: detailed report of archaeological explorations in Central Asia and Westernmost China*, 5vols., Oxford: Clarendon Press.

Waley, Arthur 1931 *A Catalogue of paintings recovered from Tun-huang by Sir Aurel Stein*, London: Printed by order of the Trustees of the British Museum and of the Government of India, lii, 328p.

Whitfield, Roderick and Farrer, Anne 1990, *Caves of the Thousand Buddhas: Chinese art from the silk route*, London: British Museum Publications, 208p.

（作者は大阪大學招聘研究員）